

「ムムで、お別れ」

——あの頂きに立って、この世から別れて行く決心した時に、彼女の意識のなかにどのような面影がkindらうか。あの優しい娘は最後に何と叫んだのだろうか。私はそれを知らない。私はそれを永遠に知ることはない。

(福永武彦「忘却の河」より)

山手 俊介

1

無言のその電話は、最近よくかかってくるようだった。受話器を取ると、一瞬ハツとしたような間があつて、しばらくすると諦めにも似た溜息のような音を立てて静かに切れた。

もちろん言葉はなかった。何か言いたげではあつたが、声は伝わってこなかった。

妻や娘が受けると、プツンと切れる。だが、私が受話器を取るとそうでもなかった。無言に変わりはないが、切れるまでにしばらくの猶予があつた。それは受話器を取ったのが私であることを確認しているかのようでもあつた。

昨夜もかかつてきた。ちょうど夕食のときだった。妻の洋子が面倒臭そうに出た。妻への電話はほとんどが携帯にかかってくるからだ。

「はい、立石でございます」

よそ行きの、取り澄ました声で妻は答える。

が、応答はない。

「もしもし、立石でございますが」

妻は声を荒げ、再度呼びかける。するとカチャリと電話の切れる音がして、ツー、ツーという信号音に変わった。

妻の表情がにわかには陰しくなった。

「また悪戯電話？——本当にもう冗談じゃないわ」

語調までガラリと変わっている。受話器の置き方も荒々しい。それほど怒る必要はないと思うのだが、これまでに何度もそんな悪戯にも似た電話を受けているのだろうか。よほど腹に据えかねていたのかもしれない。

「今度はあなたが出てよ」

拳句は、怒りを私に向けてくる。

「どうせ間違ひ電話さ、それほど怒るほどのことでもないじゃないか」

「それならそれで一言済みませんくらい言えばいいのよ」

何をそれほどまでに怒らなければならぬのか。世間では気配りの利く、私に言わせれば外面のよい妻が、家に入らないことがあるとすぐに見せるもう一つの顔がそこにあった。結婚した当初はさほどでもなかったが、今思えば初めのうちははしおらしく演じていただけだったのだ。甘やかされて育った、若いころからの我儘ぶりは、変わっていなかったのかもしれない。

しかし、それだけだったのだろうか。

あるとき、——それは娘の美緒が小学校に通い始めたころだったが、ちよつとしたいさかひがあり、そのとき、何気なさを装いながら私に訊いてきたことがある。

「あなたの昔の彼女、これだったんでね？」

指を二本差し出し、蔑むような眼を向けたことがある。口論で負けた腹いせの上でもあった。

「何のことだ、それは？」

「とぼけないでよ。——まっ、知らないと言うのなら、それでもいいけど。——でもあなたさ、専務に助けてもらったのよ。わたしにも。——感謝してもらいたいほどだわ」

その意味するところは分っていた。どこからか、私の過去の出来事を聞きこんできたらしかった。

「まあ恋愛、こつこつですんだみただからよかつたけどね」

勝ち誇ったかのようにそう言うときつさつと自分の部屋に閉じこもった。

そのときはさほど私も気に留めなかったが、以来、月日が経つにつれ、私に対しての蔑みだけでなく、生活そのものに気分のムラが見えてきた。娘が中学校に上がるころには、それが露骨になってきた。自分の思い通りにならないとヒステリックになり、私に八つ当たりする身勝手さも見せ始めた。私にすれば知られて困る過去ではなかったが、二度とそのことを口にしなくなつた分だけ心の中では、そんな男が自分の亭主だったことに日々屈辱を募らせ始めていたのかもしれない。変な気位の高さだけは持っていた。その態度は、私などとは住む世界が違う、とても言いたげだった。

私との生活に嫌気が差してきているのは否めないにしても、しかし、娘の前でくよりはもう少し母親としての立場を考えてもよさそうなのだろう。

今の仕事に就いてからはなおさらだった。元来の我儘に加え、最近は絶えず何かに苛立っている。仕事の上でトラブルでも抱え、うまくいかないことでもあるのかもしれないとは思ふものの、客相手の仕事をするということはそういうことでもある。無理難題は絶えずつきまとう。

これといった営業経験もない妻がなぜそのような仕事を選んだのか、勤務時間に制約がないといいながらも、ジュエリーの販売などこんな地方の田舎などで容易なものでないことぐらひは初めから判断できそうなのだった。

しかも、その仕事は自分が勝手に決めてきて、私には無断で始めたのだ。生活に困ってなどではない。厳しい言い方をすれば、妻であることを放棄したのに等しかった。

高校一年になる娘の美緒は、そんな母親を醒めた眼で見ている。娘の眼にも、その振る舞いは身勝手に映るのだろう。

その夜も、妻の苛立ちを冷やややかに見つめ、また始まったとばかりに私にウインクをして見せた。

「そうよね、最近間違いか悪戯か知らないけれど、変な電話が多いわ。——でもさ、お母さんにかけてくる人の中にも、わたしが出るとガチャンの人がかなりいるよ。だからこの間なんか何も言わないで相手が声を出すまで黙っていたの、したら男の人だった。よほどお母さんになりすましてお相手をしてさしあげようかと思つたわ。声がよく似てるってみんなに言われているの。——だからお母さんもさ、電話を受けるときそうしたらいいのよ、したらそんなに怒らなくて済むわよ」

かなりの皮肉である。妻も耳が痛いだろう。

それにしても、娘は近頃父親の私が驚くほど母親に対し、挑戦的にものを言う。それも私が一緒のときはなおさらだ。語気も強い。

「何の用事か知らないけれど、今のお母さんの言葉をそのまま相手の人に返してあげたいぐらい。いい大人が失礼の一言ぐらいい言えないのですかって、ね。——でも、お母さんにかかってくる電話の相手、会社の仕事関係の人じゃないよね？会社の人だったら必ず先に自分の名前を名乗るもんね」

意味ありげに笑い、それからじっと母親を睨みつける。

いつころからだろうか、娘はことあるごとに母親に対し反抗的な態度をとるようになった。二人だけのときはほとんど言葉も交わしていないようだ。言葉を交わせば言い争いになるようだ。

そんな娘が煙たいのか、妻は私がいると決まって逃げるように奥の部屋に姿を消す。

娘はうすうす何かを感じているようだった。いや、すでに知っているのかもしれない。母親に侮蔑のこもつた視線を容赦なく投げつけるところなど、まるで汚れたものを見るようでもある。ひよつとして、妻になりすまして電話の応対をしたのかもしれない。

十五歳。——誤魔化しの効く年齢などではもうないことぐらいい妻にはわからないのだろうか。娘はとにかく敏感に嘘を見抜く。ましてや女同士である。嘘には鋭い。母親の行動に厳しい眼を注いでいることぐらいい気がつきそうなものだ。

仕事の打ち合わせといいながら、帰宅の遅い日が多かった。そんな夜は決まって飲んでた。酒の臭いと、趣味の悪いコロン匂いが強かった。

私が知らないと思っているのか、それとも知っているも何もできないと高をくくっているのか。それはわからないが、かなり前から男がいるのは明らかだった。どうやら特定の相手がいるようで、こっそり携帯でやり取りしている。多分今の仕事もその男に唆されたのだろう。妻の名前などさほどのことはないが、父親はこの地方ではかなり名前を知られている。多くの名誉職を引き受けており、商工会では一目おかれている。どのような営業でもその娘といえれば使える。

私の前では携帯のベルが鳴つても相手を確認するだけで、出ることはないが、化粧室で声を潜めて話をしてるのは知っていた。最近メールでやり取りをしているようでもある。妻より年下の営業部長とかいう男である。その他にもたまに家の電話にかけてくる者もいた。おそらく家の方にかかってくるのは単なる飲み友達なのかもしれないが、それにしても相手の男たちも節度がない。娘の言うのも納得できる。

今になって私はこの結婚が間違いだつたとは思いたくなかったが、明らかに妻とは別の世界に生きていた。

なぜあの時もう少し時間をかけて考えなかったのか。いや、勇気を出して専務からの結婚話を断れなかったのか、と悔いる。会社を辞めても仕事などその気になつて探せばこんな田舎の町でも見つけれられたはずだった。一人息子で、いずれは親を看なければならぬことなど所詮はその場しのぎの言い訳に過ぎなかった。甘い話にのせられた自分が愚かだったのだ。

新婚旅行で訪れた洞爺湖畔のホテルで迎えた初めての夜、妻がこっそり不満そうな顔をしたのを忘れない。あるいは私の勘違いであったのかも知れないと思うものの、時には煮えたぎるような屈辱を受けながら、それでも耐えてきたのは自分の中のどうしようもない弱さ以外のなものでもなかった。それまでの私には望むべくもない生活が結婚と引き換えに約束されていたからだ。この魅力的過ぎる約束には逆らえなかった。弱さは打算を肯い、打算はさらに弱さを増殖させる。私が見本だった。

2

その夜の電話も、だから最初は間違い電話かと思った。大事な用件ならそれぞれの携帯にかかつてきたからだ。

妻はその夜も出かけたままで、まだ帰っていないかった。連日の夜更かしである。

夕食の後、娘はいつになく私をクラスメイトの噂話に巻き込み、話題が尽きるころそろそろ寝るかな？と言つて風呂に入っていた。

十時半を過ぎたころだった。ビールを片手にテレビの洋画を居間で観ていた私は重い腰をあげ、受話器を取った。

「はい、立石ですが——」

返事がない。

「立石ですが、どちらさまですか」

無言電話である。しかし、いつもならすぐ切れるはずの電話が、今夜は切れない。

「もしもし——」

私は繰り返した。耳を澄ますと、受話器の向こうから微かな息遣いが伝わってきた。

そのとき、もしかしたら？という閃きが走った。まさか、とも疑った。——が、このところの相次ぐ無言電話。以前、それも十年以上も昔にこれに似た無言電話があったのを突然思い出したのだ。記憶が逆流した。

——ひよっとしたらあいつでは？

もう一度呼びかけてみた。

「——もしもし」

だが、今夜の電話は切れない。私の言葉をじっと待っているようでもある。閃きのままに相手の名前を呼んでみた。

「——夏ちゃんかい？」

しかし、返事はない。そのくせ電話は切れない。

「もしもし、もしもし——。夏ちゃんだろ？」

私は繰り返し呼びかけた。明らかに戸惑いが受話器を通して伝わってきた。閃きは確信に変わった。

「やっぱり夏ちゃんだね？」

間違いない。私は言葉を呑んだ。

「今、どこにいるの？」

知りたかった。しかし、言葉が続けようとした時、娘が風呂から上がってくる気配を感じた。そのまま電話を続けるわけにはいかなかった。慌ててもう一度後でと呟き、一方的に携帯の電話番号を言つて受話器を置いた。私の携帯の番号は覚えやすかった。

何食わぬ顔でテレビに向かったものの動揺しているのが自分でもわかった。まさか彼女が今になって電話をかけてくるとは思ってもみなかった。

「電話？」

「ああ、また間違い電話だった」

娘の手前、そう言いつくろつた。動揺を隠すのにかなりの演技力を必要とした。どこかに娘への後ろめたさ

があったからだ。

ビールを口に運びながら、苦い思いを嘔み締めた。それは自分の弱さと不甲斐なさに繋がっていただけに余計だった。

娘はバスタオルで髪を拭いながら居間に入ってくると、面白い？と私の横に座った。シャンプーの爽やかな匂いが救いだっただ。

娘は私の飲みかけたままの缶ビールに手を伸ばし、それが癖になっているウインクしてみせると一口飲み、空になったのを確かめてもう一缶冷蔵庫から取り出した。

「ま、いいから、いいから」

たしなめようとする私をおどけて制し、新しい缶ビールをハイと私の前に並べる。

「お父さん、今度さあ一緒に飲もうよ、いいカラオケのお店見つけたから」

「ここら、何を言ってるんだ。まだ、お前は高校生だろ？」

「そう固いことは言わないの。絶対に人様の前では飲んだりしないわよ、心配しないで。ウーロン茶で我慢してあげるから。それにさ、お父さんもたまには若い娘とデートするのって悪くないでしょ？」

この時間になっても帰ってこない妻を待つ私を憐れんでのことか。冗談めかしてはいるが、娘の声には私への労わりがあった。おそらくは私たち夫婦の関係が、すでに修復すらかかない状況にあることを娘なりの嗅覚で感じとっているのかもしれない。

それにしても不甲斐ないのは私だった。

娘がたまらなくいらしかった。

3

あれから十六年が経つ。私は二十二歳、あいつは二歳年下で、ほんのまだ子供だった。言葉を交わすとき、どこか体で話をするようなところがあり、軽い冗談でさえ本気に受け取るようなところがあった。他人の話や鼻先で聞き流し平然としている長けた女子社員にはない初々しさがあった。

「夏ちゃんには冗談も言えないなあ」

下ネタを得意とする工場長も、彼女の前ではそのネタが上滑りをした。

「やりにくい、やりにくい。——ま、いずれはその辺のお局様みたいになるんだろうけどよ。立石、お前の担当にするわ、冗談も少しは通じるように教育してくれ」

私たちは地元の小さな、隔日刊のローカル新聞を発行する会社に勤めていた。私は営業部、彼女はアルバイトだったが、工務で写植のオペレーターをしていた。

工場長としては、私を彼女の「子守り役」に指名したのだろう。私もまた営業部の人間としては、冗談の通じない堅物と見られていたのだ。

「それでよく営業が務まるんだから、世の中つてのはわからないもんだ」

工場長なりの皮肉だったが、私なら任せておいても安心だという気持ちがあったのかもしれない。営業部に独身者は私しかいなかったし、工務も含めて、新聞社というところはどこか一癖も二癖もあるような人間の集まりだった。

ところが、その冗談の通じない者同士の感覚がピタリと合った

私がラフで書いた広告原稿を、彼女に手渡すと、さほどの説明もせずには彼女なりのセンスで版下に作ってくれたのだ。

「うまくお店のイメージが出ているよ」

お世辞ではなくいつもそう思った。

訊けば高校時代は美術部にいたと恥かしそうに答えた。どちらかというポップやイラストを描くのが好きで、原稿のレイアウトなども得意なようだった。これまでの作品も、こっそり見せてもらった。イラストは腺

が固いと思つたが、デッサンはきちんと出来ており、緻密な作品ばかりだった。十分使えた。

だから原稿はついメモ書きのまま、彼女に頼んだ。私が考えるのとは遙かにセンスに違いがあった。かなりの無理もきいてくれた。

当然同僚の域を超えるのに時間はかからなかった。

食事に誘つたのがきっかけで急速に親しさを増した。休日ともなればデートを重ねるようになった。関係ができたのも必然的な帰結だった。若さに任せて、とは言うまい。互いにそのころはそれなりに将来を見据えていた。

しかし、彼女の親や姉はそれを知らなかった。知らないうちに、関係は深まった。知れば反対するのは眼に見えていたし、そのころの私の給与ではとても生活はできなかった。

熱情だけが先行した。私も彼女もあまりにも若すぎた。

それに結婚を考えていたと言ってもまだ数年先の話だった。彼女の家族に承諾を得ようとしても、相手にされなかつただろう。ままごとのような、それでいて若さに任せた熱情だけは一人前の危ない関係でもあった。

とくに十二歳年上の県職員である兄は彼女にとつて親代わりのような存在で、二十歳になつたばかりの彼女をまるで子供扱いだつた。実際一回りも年齢が異なればそんなものだろうが、彼女の家庭は私の眼には尋常ではないように思えた。彼女を通しての印象だったが、ひどく世間体にとたわるようだった。ことに兄はうるさそうだった。

その兄に、私たちの関係が知られてしまった。

友達の一線を超え、関係が深まるにつれ、彼女の帰宅時間が遅くなつたのを、家族が不審に思い始めた矢先だった。

兄は、彼女を問い詰めた。おそらく容赦のない暴力にも訴えられたことは想像に難くない。

結局、彼女は言い訳もできないまま家族の前ですべてを話してしまった。話さざるを得なかつた。彼女もまた信じられないほど幼すぎたのだ。

その結果、私はその兄と家族に呼び出された。打ちひしがれた彼女と私を並べ、家族全員が取り囲んだ。針の筵だった。家族の険悪な視線が突き刺さるように私に注がれる中で詰問された。

「妹をおもちゃにする気か」

怒りで体を震わせながら、兄は私に言い放つた。顔が赤黒く染まっていた。温厚で、人当たりの良いと評判の兄が見せた憤怒だった。

「妹をどうするつもりだ。女を騙すようなマネをするな」

怒気が、家中を震え上がらせた。

「結婚したいと思つています。結婚させてください」

私は必死で言つた。しかし、それが火に油を注いだ。

「ぶざけるな。どの面さげてそんなことが言えるんだ？お前のしていることが同じ人間に対してすることでも考えているのか。人を見下げるにも程度がある。こつそり四本指で俺たちを示すらしいが、犬や猫と同じような畜生の仲間じゃないんだ」

怒りに体が震えているのがわかつた。

「――？」

「あつちの人間に対するそれがお前らの世間の常識なのか」

「――？」

当時の私には咄嗟に言つていることの意味が理解できなかつた。四本指でさす？犬や猫と同じ畜生の仲間ではないとはどういう意味か。あつちの人間に対する常識って何のことなのだ？

兄は明らかに酒を飲んでた。言葉が上ずり、呂律もきちんと回っていない。言つていることの意味がわか

らないのも当然だと思つた。

妹との内緒の関係が、親代わりの兄にとつて、酒の勢いを借りなければならぬほどの怒りだったのかもしれない、と思うしかなかった。

「ポーナスも出ないような田舎新聞の安月給でどうやって生活ができるんだ。誰かにたかるか」

その顔が引きつるように歪んだ。私の立場との違いを強調して、無理に嘲笑っているのだと、そのときは思つた。事実、私とはすべてにおいて雲泥の差だった。彼は出先とはいえ県の職員で、地方事務所での肩書きは次長、待遇は部長級だった。家族の、人を値踏みするような眼差しは冷ややかで、厳しかった。

「おのれの立場を考えろ。『同和』の人間だと思つて、人を見下すにもほどがある」

——あつ！

私は瞬間、言葉を呑んだ。一瞬にして氷解するものがあつた。そんなことはただの一度も考えたことがなかつた。まさかそのようなことが問題になるなど、まるで思いもかけなかつた。

しかし、問題の一端はそこから出ていた。

長い年月のうちに作られた偏見が、それを受け続けた側の人たちにとつて癒しがたいまでの深い傷を残していることに思いが至らなかつた自分に初めて気づいた。

私は自分の浅はかさに、口を噤むしかなかつた。そんな差別は権力者なり、既得権者が保身のため、制度として作り上げた偏見に過ぎないと言いつつしても、この期に及んでそんな言葉はすでに詭弁にしか取られなかつた。

その上、兄は私個人の行いはもちろんのこと、どうやら職業も気に入らなかつたようだった。小さな町の田舎新聞に対する蔑みも感じられた。県職員として、いわば出世コースを歩いている兄からすれば、節操のない小さなローカル新聞などそのように見えていたのだろう。

実際のところ些細な出来事、例えば広告主の息子や娘の結婚や東大、京大の合格までがまるで大ニュースかのように報じるちようちん記事まで載せる新聞は、小さな町で話題は提供したが、株主や広告主、果ては地元選出の政治家にはまったく弱い新聞との視線を向ける人は多かつた。

広告の依頼に回つていて、時には公然と「新聞にいらんこと書かれたらかなわんからなあ」と冗談とも本心ともつかぬ言葉を吐く商店主もいた。つまりは新聞への広告は、いざと言うときの口止め料である。付き合いをしておけば、何かのときに泣きつける。

「夏子とは二度と会うな、良いな。——場合によっては出るところに出るからな」
知り合いに県警の警部補をしているという友人の名前さえ挙げた。

しかし、振り返ると、そのように判断されてもやむをえなかつた。初めは彼の言っていることの意味が理解できず、怒りの原因すらわからなかつたが、それがすべてではないにしてもその根本のところには横たわるもの、正体が納得できた。しかし、私にも言い分はあつた。

——いつ、誰が彼女をおもちゃになどしたというのか？

確かに順序として親の許可を貰うまでには到つていなかった。常識を踏まえた手順もきちんとできてはいなかつた。それは認める。けれど私の方こそ偏見にとられるような程度んの低い、安っぽい人間などに見くびらないでほしい。彼女とのことは、互いの自覚の上なのだ。——そんな反発心すら生じた。

私もまた幼かつた。あまりにも世間を知らなすぎたのだ。

この地方に昔から根強く残る差別意識。むろんそうした地域のあることは知ってはいても、その間に横たわる強固な壁の厚さを考えもしなかつたのだ。

今はそんな時代ではない、私はそんな偏見などこれっぽちも持っていないと言つてみたところで、結果として行動が伴つていなかったのだから、詭弁に過ぎない。誤解を招いても仕方ない行動をとつていたのは否定できなかつた。あまりに無知であり、それ以前に大人としての常識を欠いていた。

彼女は？——とそのとき、私は部屋の片隅に視線を走らせた。最初から最後まで下を向いたまま、小さくうずくまり、声を殺して泣きながら震えているだけだった。泣き叫んでも、自分の気持ちを訴えることや兄に対して私との将来を許して欲しいとは言わなかった。ひたすら脅え、その身体を震わせているだけだった。

その姿に私はすべてを察した。問題はそれほど大きかったのだ。

私が来るまでによほど彼女は責められたに違いなかった。ずっと下を向いていたのもその形跡の残る顔を見られたくなかったのかもしれない。脅え方は普通ではなかった。

その時の凍りついた重い空気を、今でも忘れることはできない。

「二度と妹には近づくな、いいな」

兄は履き捨てるようにそう言い、無理やり彼女を引き連れて奥の部屋に消えた。

彼女はその後翌日から会社に来なくなつた。体調が悪いと休みを取り、その後こそり辞めた。それ以来、兄や家族の厳しい監視下に置かれているようだった。

4

彼女が、姉の嫁ぎ先である横浜へ行つたと知つたのはそれからまもなくだった。

「結婚するらしいわよ。いいの?」

同じ営業部で私たちの関係を見守り、応援してくれていた集金係の山下さんから耳打ちされた。記者より早くいろいろな情報を聞きつけてくる人の良いおばちゃんだった。

「県事務所で課長さんたちがお兄さんにお祝いを言ってるのを耳にしたの。妹さんが横浜に嫁ぐそうでおめでとーございませす、つて」

「——」

「可哀相にね、夏ちゃん。立石さんひつさらつてきなさいよ。二十歳を過ぎてるんだから大丈夫よ」

私も考えないではなかった。だが、すでに彼女とは連絡さえ取れなかった。山下さんに頼んで何度か電話をかけてもらったが、その都度彼女はいないとそつけない母親の返事が返ってくるだけだった。家族もまた用心をしていたのだ。

それから一ヶ月ぐらい経つたころだった。彼女から会社の私の机に電話があった。しかし、声を聞くだけで、こみ入つた話は職場ではできなかった。途中で電話も途切れた。どうやら公衆電話からかけているようだった。やはり横浜に行つていたので。

夜、家のほうにも何度か電話があった。母は無言の電話を間違い電話だと信じて疑わなかったが、私が出ると彼女のか細い声が受話器を通して伝わってきた。

結婚の話が進んでいる、と言った。兄が勧めているようだった。

一度思い切つて逃げ出して来い、と言つたことがある。腹をくくつての呼びかけだった。——が、それに対する返事はなかった。

「鉄平さんに迷惑がかかる。」「両親にも」

決まって泣きながらそう言い、長引くと電話は切れた。十円玉が途中で切れたようだった。

やがてその電話もいつしか途絶えた。姉に隠れての電話が気づかれたのかもしれない。

一年後、私は上司である専務に勧められるまま見合いをし、社の株主であり、地元では名の知られた経済人であり資産家の一人娘——つまり今の妻と結婚をした。資産家の娘と結婚することで、つまらないことだがどこかに彼女の兄や家族に対して優越感を持ちたかつたのかもしれない。虎の威を借る狐にも劣る行為でしかなかったが、若かつたのだ。鼻を明かしてやつたとの気持ちがないではなかった。人を値踏みするように見下したあの時の視線だけはどうしても消せなかったのだ。

結婚にあたっては、親との当面の別居を望んだ妻の要望で、近くに家を新築してもらった。職場での地位も上がった。営業部長という肩書きが名刺に刷り込まれた。むろん給与も待遇も変わった。末席とはいえ役員の一にもなった。

会社は会社でその見返りとして設備投資のためのかなりの増資を受けたようだった。新型のオフセット印刷機を導入し、新聞も待望の日刊化に踏み切った。

私の気持ちの中には割り切れない、納得し難いものがあつたが、しかし、それが世の中の仕組みだと強引に納得させた。納得させることで彼女を忘れようとし、自己の行為を正当化した。

そんな自分が、今になって愚かさを嘆いても始まらなかつた。不甲斐なさを責めても遅かつた。選択の誤りを誰よりもわかっていただけに開き直るしかなかつた。

5

彼女は横浜で結婚しているはずだった。自分で確かめたわけではなかつたが、あの時彼女自身話が進んでいると言っていた。関係が途絶えてからでも十五年が経つのだ、当然別の人生を歩んでいるものと信じて疑わなかつた。

その夏子が、突然電話をかけてきた。おそらく間違い電話、いや無言電話がかかってくるようになった半年ぐらい前から、私に連絡を取ろうとしていたに違ひなかつた。滅多に電話を取らない私が気づかなかつたわけだったのだ。

そういえば娘が受話器を取ったとき、無言のまま、なんだかゆつくりと静かな音を立てて切れた、と話していたのを思い出した。

「間違い電話にしては絶対変だつたよ」
事情を知らない娘は首を傾げていた。

なぜそのことにもっと早く気がつかなかつたのか。自分の迂闊さが腹立たしかつた。しかし、その迂闊さをもう一度繰り返すことになるなど、そのときは想像すらしなかつた。

当然、今夜の電話も初めはまさか？と思つた。
——が、いつまで経つても切れない無言電話に、私の中で閃くものがあつた。まさかは瞬間にして確信に変わった。返事はなかつたもののあいつに間違いはなかつた。

しかし、今になってなぜ？
結婚をしていたのではなかつたのか。

とつくに別の人生を歩んでいたのではなかつたのか。
振り返ると苦い思い出が次々とよみがえつた。取り返しのつかない悔いが今更のようにこみ上げてきた。視線はテレビに向けられていたものの、一向にドラマの内容が入ってこなかつた。ビールの量だけが増えてい

た。
気がつくと、顔を真っ赤にした娘の体が、いつの間にか崩れるように私の肩に寄りかかっている。どうやら眠ってしまったらしい。

おそらく飲んだこともない酒を飲んだりして見せ、それで急に酔いが回ってきたのだろう。それとも酔つたふりをして私に甘えて見せているだけなのだろうか。

今までほんの子供でしかないと思つていた娘が、ふとしたときに見せる女の仕草に時々戸惑うが、その夜ばかりはまだ幼かつたときのよう抱きしめたかつた。

6

電話は、すぐにはかかつてこなかつた。

——が、我が家への無言電話は。ピタリと止まったやはり彼女だったのだ。私は確信を深めた。横浜からだつたのだろうか。それともうちに帰ってきているのだろうか。相手が彼女だったとわかると、今度は、私に連絡を取ろうとしている今の彼女が気になった。携帯の電話番号を教えろ、かけてくるだろうか。

私の携帯の番号は覚えやすかった。頭の「090」以下、それに続く四桁も次の四桁もそれぞれに同じ数字が並んでいた。咄嗟の時でもメモを取らなくても簡単に記憶できた。

私は携帯の呼び出し音が鳴るのを待った。彼女の声を聞きたかった。

そんなある日の夕方だった。あの夜の電話から一週間が過ぎていた。仕事を終えて帰ろうと机の上を片付けている時、呼び出し音が鳴った。覚えのない電話番号が表示された。

「はい、立石です」

「——」

応答はすぐにはなかった。微かに躊躇いがあった。私はそれが彼女であることにすぐ気づいた。

「夏ちゃんだよね？」

「——ええ」

ようやく返事が返ってきた。懐かしい声だった。寂しげではあったが、耳に優しくかった。

「今、どこにいるの？」

「近くの『静やさん』」

二人がかつてよく使った会社の近くにある喫茶店だった。今も仕事でたびたび利用している。マスターとは親しくしてもらっており、仕事上時々無理も聞いてもらっている。夜は十一時まで開いており、あのころは一杯のコーヒーを前に、とりとめもないことを夜遅くまで語り合った場所だった。

「うちに帰っていたんだね？」

「ええ、一週間前」

「家に電話をくれたのは夏ちゃんだったんだね？」

しかし、彼女はそれには答えず、今、時間が取れるかと不安そうに訊いた。

「五分もすればそこに行けると思う」

私はそう言つて電話を切った。長い歳月の隔たりなど信じられないようなあつけなさだった。

私は娘の携帯に電話を入れ、仕事で遅くなると伝えた。家にかけてもどうせ妻は帰っていない。広告原稿の打ち合わせだと弁解してみた言い訳も付け加えた。

「遅くなるかもしれないから先に休みなさい」

「わかった」

そつけない返事だったが、そつけなさの中に娘なりの温もりがあった。娘もまた妻の帰りが遅くなることを知っていたからだ。

〈ある独白①〉

電話など本当はしてはいけなかった。するべきではなかった。

横浜に来て二年ほど経ったころだったように思う。突然理由のわからない胸騒ぎを覚えて、たまたまなくなり姉の留守を良いことに、一〇四で彼の名前を言い、彼の家の番号を調べた。あたしの覚えていた電話はすでに使われてなく、思い切つて「NTT」に問い合わせたのだ。新しい住所はわからなかったが、小さな田舎町のことだから、その町に住んでいれば、そして彼の名前で登録をしてあればすぐに調べられると思った。

——わからない方がいい。

どこかにそんな、まるで心にもない気持ちで働いていたのを思い出す。そうすればきつぱりと自分の気持ちの決着がつくはずだった。けれど、すぐにわかった。同姓同名の人が、人口三万人にも満たない町に何人もい

るとは思えなかった。

「ほかにも同じ名前でありませんか。立つ石に、鉄平は金属の鉄と平らという字です」
くどいほど尋ねたのは心とは裏腹な気持ちでどこかにあつたからだろう。

——いいえ、ほかにはこのお名前での登録はございません。

あたしは、少し震える指で、教えられた番号のボタンを押した。三回、四回、五回。呼び出し音が続いた。六回目だった、受話器を置くことしたら、女の人の声が電話に出た。

あたしは声が出なかった。

——もしもし。立石ですが。

その声は優しかった。けれど、どこか冷たく響いた。

——もしもし、もしもし？

あたしは無言のまま受話器を置いた。激しく胸が震えた。電話などかけるべきではなかった。彼が結婚をしても当たり前だったのに、ショックは大きかった。もう二度とこんなことはすまい、と言い聞かせた。涙が止まらなかったが、これで自分の気持ちに決着がついた、と思った。

田舎の兄からあたしに結婚の話が来たのは、それからまもなくしてからだった。相手はかなり年上で、再婚だったが、社会的にも恥ずかしくない立場の人だと聞かされた。幸い子供はすでに独立している、とも言った。横浜に住んでいるらしく、兄の大学時代の先輩が紹介してくれたということだった。

姉も良い話だ、と乗り気になっていた。あたしの知らないところで、すでに話は進んでいるようだった。本籍も姉の住所に早く移しておけといった。今度ばかりはまとめたかったのだろう。

高校、大学といつも優秀な成績を収め、県職員の試験も悠々と合格した兄だった。いつもお荷物だったあたしとは雲泥の差だった。そんな兄には逆らえなかった。

彼にたまらなく会いたかった。結婚してあたしとは別の人生を歩んでいることはわかっている、会えばあたしを思い出してくれるかもしれないと思った。

二度としてはいけないと決めていたのに、また電話をかけるようになったのはそのころだった。いつも彼は家にはいなかった。職場にかけても出かけています、の事務員の声が返ってくるだけだった。「お伝えしておきませぬ」と言われても、名乗ることなどできなかった。

「改めてお電話させていただきます」

そう言うのが精一杯だった。やはり電話なんかしてはいけないのだ、とそのたびに何度言い聞かせたか知らない。

体調に異変のようなものが現れたしたのはそれからだった。結婚の話が具体的な形となってきたころから、自分で、自分を引きずつてもいるような重たさが日ごと募りだした。体の置き場さえないようなけだるさと、息苦しさが付きまとうようになった。

眠れない夜が続いた。眠っても、眠りが浅いのか、気味の悪い、嫌な夢ばかり見た。

自分が死んでお葬式をしている場面であったり、戦争なんか知らないのに敵に追われ、逃げ切れなくなつて死体の中に同じように死んだふりをして倒れていると、今度はその死体の一つ一つを兵士が銃でもう一度止めを刺して回つていて、あたしに近づいてくる夢だったり、あるときはプールの中で死んでいるあたしの体から真つ赤な血が流れ出し、水の中に赤く血が広がってゆく光景だったりした。夜眠るのが怖くなるほどだった。色のついた夢を見始めたのはそのころからだった。

真つ赤な血の色。それが水の中でどんどんと広がり、プールが一面真つ赤な色に染められていくのだ。もがけばもがくほど血の色は拡がり、透明な水を覆い尽くした。食欲も落ちた。体重もかなり落ちた。

自分から内科の病院に行くようになったが、どこも悪いところは見当たらず、医者は疲れかもしれませんとビタミン剤を注射してくれるだけだった。

そんなある日、たまたま通いで来ていたお手伝いさんに勧められて、精神科医をたずね診察をしてもらっ

た。身内にあたしと似た症状を持った人がいて、ひよっとしたらと思つたのだと言つた。

——悪く取らないでくださいね。絶対に気を悪くしないでくださいね。

彼女はくどいほど姉にそう念を押して、知っている総合病院の精神神経科をあたしに教えてくれ、姉を説得して連れて行つてくれた。

レントゲンや心電図での検査の後、心理テストがあつた。絵も描かされた。長い問診の中で細かな状態を訊かれた。カルテにそれらの症状とともに「抑うつ症」とスタンプが押されるのをあたしは見た。その日から抗うつ剤と睡眠促進剤を飲むようになった。

体の重たさはなかなか消えなかつた。——が、その日からやつと夜眠れるようになった。嫌な夢も見なくなつた。薬はよく効いて、目が覚めてからもボーッとしている時間は多くなつたが、怖い、嫌な夢を見ないで眠れるようになったのには少しだけ嬉しかった。

けれど、促進剤を飲まないと今でも眠りは浅く、夢ばかり見る。そして、夢でひどく疲れる。

おかげで結婚の話は、一時中断したが、しかし相手の人は諦めていないようで、よく体調はその後どうですかと電話がかかつて来ているようだった。

兄のことだから、あたしが精神科ではなく、ほかの病名で通院していると相手に話しているのだろうかぐらいはわかっている。妹が精神科に通つているなんて言えるわけがない。

でも、兄はいつからあんなふうになつたのだろう。まだ中学校に行つていたときは優しくかつた。高校時代だったか、ぼんやりとした記憶の中で、兄が母や父となにか泣きながら話し込んでいることがあつたのを微かに憶えているような気がするが、まだ小さかつたあたしの思い違いかもしれない。

突然人が変わったように勉強をするようになり、優しさも、あたしには見せかけのように思えるようになった。何かがあつたのは確かだと思ふけど、なにが原因だつたのだろうか。私たちへの偏見だつたのだろうか。

「——今はそんな時代じゃないわ」

彼との付き合いが知られたとき、あたしは必死で彼を弁解した。けれど、兄は嘲るように言つた。

「それならなぜきちんと仲人を立てて挨拶に来ない？」

「だつてまだそこまで話し合つてないもの」

事実、親しくなつたとはいへ、まだごくたまにお茶を飲んだり、食事をする程度のお付き合いだった。

結婚を考えるようになったのは、それからずつと後だった。不安がなかつたわけではない。あたしはだから彼を求めた。きつと彼を自分の側に寄せ付けておきたかつたのだと思ふ。どんなことがあつても離れられないような彼との関係がほしかったのだと思ふ。

兄からすればそんなことは当然許せないことだった。最後の最後まで兄や家族には彼との関係を黙っておくべきだつたのだろうか。絶対に黙っておくべきだつたのだ。

「おもちゃにされるなよ」と兄が言つたとき、もう付き合い合つてなんかないとしらを切りとおせば良かったのだ。

彼が、兄の考えているような人間じゃないといつても信じてもらえないことが分かつていたのに、なぜあたしはすべてを話してしまつたのか。

「あたしのために、ごめん」と何回呟いたか知れない。

7

喫茶店の扉を開けたとき、視線は真つ先に一番奥のテーブルに向いていた。あのころの二人の指定席だった。彼女は気配で振り向き、そつと手を上げた。まるで変わらない彼女がそこにいた。時間が止まつていたような錯覚が私を襲つた。

少し痩せてはいたが、ショートカットの似合う彼女はそのままだった。化粧が少し濃くなつていてと感じたの

は、口紅の色が強かったからだろう。

テーブルに着き、コーヒーを注文すると、改めて彼女を見つめた。

「痩せたみたいだね」

「——少しだけよ」

彼女は弱々しく眼を伏せた。変わらない、と思つたのははにかんで、いつも一歩引いたような表情を浮かべる最初の印象だった。

昔もそうだった。どこか頼りなげで、時々思いつきり肩を揺さぶつてやりたいほどの衝動に駆られることがあつた。

今、目の前にいる彼女もそうだった。その意味では変わっていないかつた。しかし、その上で明らかに以前の彼女とは異なる変化があつた。若さが放つ張りだつた。互いにそれ相応の年齢になっているのだから仕方がなかつたが、彼女には花を咲かせることは咲かせたものの、与えられるべき養分や水が注がれることもないまま、萎れかけている花のようなやつれが、早くも見て取れた。まだ三十五か六歳のはずだつた。世間では女の盛りとも言う。——にもかかわらず、幼さを残しながらも、体全体からは華やきが、そして張りが失われていた。化粧で誤魔化してはいるものの十五年の間、じつと日陰でしか生きてこなかつたということか。

「——随分変わったでしょう？」

「そうでもないよ。お互いに年だけはとつたけどね。——でもしょうがない、十五年も経つんだから」

確かに仕方のないことだつた。

「少しは心配してくれた？」

「ああ、ずつと気にかかつていた」

「ごめんね」

「今までどうしていたの？結婚したつて聞いていたけど」

「姉のところでお手伝いさん。まだ結婚はしてない。でも話は沢山あつたわ。話だけだけれど。——みんな相手のほうから断つてきたわ、鬱病だつて言つたら。——精神科のお世話になつていたから本当のことを言つただけなのよね」

「それで、体は大丈夫なの？」

「もうね。鬱病つて言つても本当は軽い抑うつ症だつたから。今は『症』から『状態』に変わった。だから、薬もほとんど飲まなくても大丈夫よ。ちよつとだけ夜が眠れなくて困るけど」

「どうしてもつと早くに電話をかけてこなかつたんだい」

「まだ小さかつたけど、お嬢さんの可愛らしい声を聞いてしまったの。ずつと前だけ。——それからはかけられなかつた」

それなのになぜ今になって電話を？」

疑問に思いつながら、それにしてもこの十五年間、どんな生き方をしてきたのか、と想いをめぐらさずにいられなかつた。

あの当時のように、長い年月、兄や姉の監視下で脅えながら日々を送つてきたのか。

眼の前の彼女を見る限り、それに近いような年月を過ごしてきたように思え、痛ましかつた。しかし、そのことは言葉にはできなかつた。

「——でも、顔を見たら心配していたほどじゃなさそうだったので少し安心したよ」

私はわざと明るく振舞い、心とは裏腹のことを言った。——が、次の言葉が続けられずに、胸のポケットから煙草を出し、口に啜えた。

「煙草を吸うようになったのね、いつから？」

「忘れた。——お酒も飲めるようになったよ」

「いろいろあつたのね。——あたしも煙草、覚えた。もちろんこつそりだけど。吸つてもかまわない？」

「いよ」

灰皿をテーブルの真ん中に置いた。彼女はコーヒーが運ばれてくるのを待つて、バックから煙草を出した。

「お兄さんは？」

それが気にかかった。いくら十五年が経っているとはいえ、長年監視下に置かれていたことに変わりはない。今も監視が続いていないとも限らなかった。

「今は東京事務所に単身赴任。かなり前から玲子さん——お義姉さんだけど、とは別居しているからどこにいても変わらないけど」

「それで、どうして帰ってきたの？」

「時々は帰ってきてたの。でも今度は最後になりそう。あたしの住所を横浜に移すことになったの。本籍もね。向こうの区役所でもできるみたいなんだけど、その前に記念に住民票と戸籍謄本をとっておきたかったの。兄に知られたらまた叱られるかもしれないけど、あたしはこの町に生まれ育った人間だから、忘れないためにも。もちろん気持ちの整理もあつたけど。——だからいつもの調子で帰ってきたの。あれから十五年以上も経つんだから、まさかこうして鉄平さんと会ってるなんて思ってもいないわ」

「でも、本籍まで移すって、何のために？そりゃ千代田区千代田一番にでも移せるとは聞いたことがあるけど、どうしてそんな必要があるの。それに自分の人生だろ、本籍を移すということはある意味で出自を変えるところということだろ、たいしたことじゃないと言われればそうかもしれないけど、そこまでしなければいけないほどのどんな理由があるんだい？——やっぱり結婚？」

「しよがないの。そのほうがお前のためだ、といわれたら。——それにずっとあたしは兄のお荷物だから」
諦めに支配された微笑だった。

「昔から君のうちはそうなんだね。すべてお兄さんの言いなり」

「父も母も生活はすべて兄が頼りだったから。あたしも面倒を見てもらっていたし、高校にも行かせて貰った。逆らえないわ」

「——じゃあすぐにも横浜に戻るんだ。それで電話を？」

「——どうしてももう一度だけ最後に会いたかったの」

私は彼女の言葉を、そのまま気持ちの整理だと当然のように受け止めた。

「新しい人生の始まりを、素直に喜んであげたらいいのかなあ」

「世間では普通はそう見たい」

「それで夏ちゃんの後悔しないんだね？」

「——」
彼女は私の問いには答えず、寂しそうに笑った。諦めたように、そうするよりほかにないのとその微笑みは語っていた。

「本当はね、今頃になってこんなことを言うのも変なんだけど、あの時どうして鉄平さんの言うことを聞かなかったのかって、ずっとそればかり後悔していた。あれだけあたしを心配して逃げて来い、って言うてくれたのにね。——あたし勇気がなかった、ううん怖かった。足がすくんでしまつて、自分でもどうしようもなかったの。あたしが勝手なことをしたら母が責められるのもわかっていたし、ひよつとして兄の言うとおりになるかもしれないという不安もあつた」

彼女は冷めかけたコーヒーを口にし、初めて煙草に火をつけた。頼りなげな吸い方だった。持ち方もなつていない。無理やり吸っているようでもあつた。

「——でも、今の僕にはもう夏子には何もしてあげられることはないよ」

「ええ、わかっている。でも、今でもあたしのこと少しでも思ってくれていると思つていいよ」

「だから来たんじゃないか」

「そうだよわね」

彼女は、自分に言い聞かせるように頷き、しばらく黙り込んだ。次の言葉を捜しているようだった。しばらく下を向いていたが、決心したように顔を近づけ、口ごもるように、小さな声で囁いた。

「――お願いがあるの」

「――？」

「明後日の日曜日、横浜に帰るの。大阪まで送ってほしいの、だめ？」

じつと息を吞んで、私を見つめた。

「今度こそ、本当のお別れ」

その言葉が何を意味したのか、私はそのとき何もわかつていなかった。新しい人生を横浜で始める、だからあなたとの関係にもはつきりと自分ではじめをつけたい、その程度の認識だった。

「――お願い」

哀願するような、切羽詰った言い方だった。見開いた眼に焔が上がっているようだった。今まで見せたことのない視線でもあった。

なぜあの時、その眼差しを私に向けてくれなかったのか。向けてさえしてくれていれば二人とも今とは異なる、まったく別の人生が選べたかもしれないなかったのだ。

しかし、遅かった。過ぎた時間は取り戻せなかった。

私は返事に詰まった。娘の顔が脳裏を横切った。大阪まで送ってほしいということは同時に二人だけの時間を持ちたい、ということを意味してもいたからだ。

娘の顔が走ったのはそのためだ。シャイだが、父親の私を誰よりも頼っている。妻が気づかない私の心の曇さえあの年齢で敏感に読み取る。私にとって何にも変えがたい唯一の支えだった。娘だけは裏切れなかった。

「――」

彼女は視線をそらさなかった。必死さがこもっていた。

私は負けた。娘には許しを請うしかなかった。

「送ってあげるよ、夏ちゃんがあとで困るようなことにならなければ」

「ありがとう。今度は絶対鉄平さんには迷惑をかけたたりしない」

彼女はやつと素直な微笑みを浮かべた。懐かしい微笑だった。

私たちは当日* * 駅から別々に乗車し、お昼前の特急「くろしお」の車内で落ち合う約束をした。彼女は何度も念を押し、ようやくホットしたようだった。

緊張感が消え、その瞬間から昔の恋人同士に戻ったかのような安堵と親しさにあふれた関係が戻った。

ぎこちなかった会話も自然と弾んだ。彼女の顔に明るさがよみがえった。十五年の歳月の隔たりは一気に埋まったかのようにだった。

私たちは、昔のように他愛のない話に花を咲かせた。あのころと異なったのは、他愛のない話をすることで、深刻になる話題を暗黙のうちに互いに避けていたことだった。

二時間近く店にいたのだろうか。途中で食事をしていないことに気づき、私はトーストを、彼女はホットケーキを注文し、頬張った。コーヒーも追加した。久しぶりに訪れたくつろぎのひと時だった。

しかし、楽しい時間はあつとという間に過ぎた。時計を見ると、九時近くになっていた。あわてて帰り支度をした。あの頃もこうだった。いつも時間を忘れた。

帰り際、私は切ないほど昔に戻れたなら、と思った。この先、二度とこうして彼女と会うこともないと知らされただけに、微かに残っていた埋火にその瞬間、にわかにかが点いたのかもしれないなかった。

脈絡もなく彼女を初めて抱いた夜の恥ずかしさを思い出していた。

むろん彼女が初めてだった。何度も失敗をした。随分昔の出来事なのに、自分でも顔が赤くなるのがわかった。

彼女は初々しかった。両手で裸の胸を隠し、小さくてごめんねと呟き、ぎこちないまでの私を受け入れて

くれたのだった。

今度の結婚話はもう逃げようがない。あたしにかかわりなくすべてが決められていく。こんな自分なんかきつとしないほうがいいのかもしれない。

〈ある独白②〉

帰省しても絶対会えないと決めていたはずなのに、また電話をしてしまった。いつもなら電話になど出ない彼がその夜に限って受話器を取った。声さえ聞かなければ今度こそ諦めもつき、気持ちの整理もできたかもしれないのに、人生つて皮肉にできている。

でも、あたし本当は嬉しかった。彼があたしと気づいてくれたことで気持ちが緩んでしまったのかもしれない。急ぎの用事ができたのか、携帯の電話番号まで教えてくれた。後で、ゆっくり話したい、そう言ってくれたように感じた。

その夜から一週間、何度もためらった挙句、結局携帯に電話をかけ、やはり彼に会ってしまった。会わずにいられたなかった。横浜に帰らなければいけない日が迫っていた。

話したいことはいっぱいあったはずなのに、あたしは何も話せなかった。思いを言葉にするのが怖かったのだ。何かとんでもないことを言ってしまうようで、たまたまなく自分が怖かった。

「静やさん」で会った彼は変わっていないかった。あたしも変わってなんかいなかったと思う。初めは少し大人になった風に見せようとはしたけど、あたしたちの間に時間などあのとときから流れてはいなかった。時間は止まったまま、周りだけがその時間の流れに乗り、過ぎていただけだった。そのことに気づいたとき、急に緊張が消えた。彼も同じようだった。

大阪まで送ってほしい、と言ったのは、緊張が解けたあたしの甘えと我儘だったけれど、彼は唐突なあたしのお願いにちよつと困ったよう表情を浮かべたが、すぐに快く返事してくれた。あたしつてやはり悪い女だ。

でも、もうこれで未練はない。
本当に馬鹿なあたし、だと思う。兄に何を言っても相手にされないのもしようがない。

8

日曜日の昼前、私は約束の「くろしお」に乗った。新大阪までのグリーン車だった。切符は彼女が用意していた。誰にも顔を合わせることなく、私たちは束の間昔の恋人同士に戻れた。

あの頃、こうして大阪に出た。特急を利用することはあまりなかったが、帰りが遅くなったときは特急に駆け込んだ。

大阪に出たのは地元では顔を知られていたし、噂が先走るのを恐れたからだだった。結婚の約束はまだ二人だけの秘密だった。

彼女の兄や家族の耳に入り、交際を禁じられるのが怖かった。それに体の関係ができた当初、どこかまだ不安があった。ままごとのような関係ではあったが、馴染むためには時間を必要とした。こっそり地元のホテルで、というわけには行かなかった。

それが裏目に出た。帰りが必然的に遅くなってしまったのだ。ホテルで過ごす時間はいくらあっても二人には短かった。つい遅くなってしまう。

やがて帰宅の遅い彼女の行動に家族が疑問を持った。兄の耳に入り、厳しく問い詰められた。

それに彼女は耐えられなかった。すべてを話してしまった。今になって考えると至極当然だった。だが、私にはそんなボタンの掛け違いも気づかなかった。非は私にあった。私の思いやりの足りなさに原因はあった。それが兄の誤解をさらに深めた。窓側の席で、彼女は眼を閉じたまま、電車の振動に身をゆだねていた。何を考えているのかはわからなかったが、どこか安らかな表情だった。眠っているようにも見えた。

私はポケットからそっと煙草を出し、デッキに向かった。そして火をつけ、長々と煙を吐き出した。彼女をそのままにしておいてやりたかった。

ドアのガラス越しに、梅雨時のどんよりと曇った空が見えた。鈍色の海も見え隠れした。

電車はカーブのたびに大きな揺れを繰り返して、疾走していた。あと一時間もすれば新大阪だった。

彼女との結婚を夢に見、その望みがかなうと信じていたあの頃が悲しいまでに思い出された。胸が錐でもまれるように疼いた。このまま彼女とどこかに消えてしまいたいような衝動に駆られた。

席に戻ると、彼女は車窓に開けた海を見つめていた。そっと私に振り向き、哀しそうに見つめた。涙で眼が潤んでいた。

「ごめんね、あたしのために」

その手がしつかりと私の腕をつかんだ。

9

新大阪では一旦改札を出た。その日のうちに帰ればよいという彼女とは、予約しておいたホテルで遅い昼食を摂り、六時半の「のぞみ」に乗るまでの時間、部屋で休んだ。

ホテルを予約したのは私だった。横浜に帰るにはかなり早い「くろしお」で上阪したのは、彼女が大阪でゆっくりしたいと言ったからだ。それは二人だけの時間を持ちたいという意味にほかならなかった。

私たちは部屋に入ってドアを閉めるなり、どちらからともなく激しく抱き合った。

「——もう一度こうして抱かれたかった」

彼女は唇を重ねたまま、喘ぐように熱い吐息を漏らした。

昔の、あのミルクにも似た匂いが甦った。

煙草を覚えたなんて嘘だった。私の前で強がって見せただけだった。

服の上からはわからなかったが、痩せて見えたものの、あの頃よりはるかに成熟した体がそこにあった。私たちは十五年間の空白を一気に埋めようとするかのように互いを求めあった。

「あたしのために、ごめんね」

再び彼女は私の胸の中で呟いた。その言葉は私にはなく、妻や娘に向けられているようにも受け取れた。幼さをどこかに残した娘の顔が、一瞬間の中を横切った。が、妻への罪悪感はまだ沸いてこなかった。

開き直りと思わないではなかったが、妻が何をしているか、裏切り以上の行為を重ねているのを知っていたからかもしれない。もつと言え、私との結婚それ自身が、学生時代同棲していた男から逃れるためだったのも知っていたからだ。

困り抜いた父親が専務に泣きついた。私と結婚させることで専務は一石二鳥を狙った。結果的にはその後、社長の椅子まで手に入れたのだから『一石三鳥』と言うべきかも知れない。

父親の代理人として男との間に入り、カネで片をつけた。田舎の新聞社とはいえ、ややこしい話の片をつけるにはうってつけの肩書きである。

男は地元の出身だった。高校時代からの関係のようでもあった。親や兄弟が地元で健在だったことも幸いした。それとなく圧力をかけた。

仕事柄、知りたくなくてもそんな話は耳に入ってきた。世の中には悪意のない親切な人間が少なくないことも知った。

当然、妻とはもう結論を出さなくてはならない時期に来ていることはわかつていた。切り出せないでいるのは私の弱さ以外のなんでもなかった。娘がせて二十歳になるまでは、と思っているのも所詮は言い訳にしか過ぎない。

弱さは自分だけでなく、周囲の同じ弱い人間をも知らず知らずのうちに蝕んでゆく。生命の弱さがもたらす怖さがそこにある。

私たちは激情の渦の中で体を重ねた。重ねるたびに鮮明さを増し、脳裏を走る娘の顔を振り払うのに必死だった。残された時間に限りがあっただけになおさらだった。

彼女の乗る「のぞみ」の時刻が刻々と迫っていた。

10

ホテルを出たのは、夕方の六時を過ぎていた。離れがたかった。何度も体を重ねながら、気持ちは昂ぶりを増すばかりだった。果てしない肉欲と、激情が私から去らなかつた。

それは彼女も同じようだった。繰り返して、繰り返して互いをむさぼるように求めた。体も疲れを知らなかつた。彼女の指が私に触れるだけですぐに体は反応した。体の中のすべてを出し切つてもまだ足りない気持ちを抑え切れなかつた。生命の力がどれほど弱く、衰弱していたかの表れだったのかもしれない。互いが自分の本能を制御できなくなっていた。

しかし、時間は容赦なく時を刻んだ。かろうじて時間の歩みだけが私たちを現実に取り戻してくれた。シャワーを浴び、重い足取りでホテルを後にした。発車の時間まで二十分を切っていた。

新幹線の乗り場を目指し、コンコースを急いだ。何度も対向者とぶつかりそうになつたが、私は彼女が乗り遅れないように必死で人の波をよけ、その手を引っ張つた。

乗り遅れると新横浜に着くのが九時過ぎる。また言い訳をさせることになる。もう二度とそんなことをさせてはいけない。——それだけが頭の中にあつた。

私は彼女が「のぞみ」に乗車するのを見届けるつもりで先に改札に向かわせた。券売機で入場券を買う。そして急いで改札に走つた。

しかし、彼女は新幹線のホームに向かつてはおらず、そこに立っていた。立ち止まったまま、私が改札を抜くようにするのを制し「ここで、お別れ」と言った。

「お願い、ここまでにして。これ以上一緒にいると決心が鈍るから」

いつにない厳しい表情だった。無理やり笑おうとするが、顔が歪む。必死で何かをこらえているようだった。

「今日のこと、絶対忘れない。だから、ここでお別れ」

彼女の決意は固かつた。それ以上無理に送るとは言えなかつた。

「——わかつた、僕も忘れない。元気でね。何かあつたらいつでも携帯に電話してくるんだよ」

そう言うのが精一杯だった。

「ありがとう。さようなら」

彼女はそう呟いて、再会したとき、喫茶店で最初に見せたあの寂しそうな微笑を浮かべた。一瞬じつと私を見つめ、力の限り私の腕を握り、もう一度「さようなら」と言った。そして踵を返すと、逃げるようにして改札を走り抜け、雑踏の中に紛れた。一度も振り返らなかつた。

私は立ち尽くしたまま発車の時間までそこで待つことにした。ひよつとした戻ってくるかもしれない、そんな気がしたのだ。その時は何もかも捨ててもかまわないとさえ思った。彼女となら、死への誘惑さえ覚えていた。

しかし、それは私の未練でしかなかつた。今度こそ本当のお別れだった。エスカレーターの手前で、彼女の後姿が人ごみの中に微かに見えた。

今ならまだ間に合う。彼女を引き止めることができる。激しく胸騒ぎがし、私を促す声があつた。私は追

いかけようとした。

その時だった、彼女がエスカレーターに乗ろうとして振り返ったように見えた。その顔が私を凍りつかせた。振り返ったひょうしに私の眼に飛び込んできたのは彼女ではなく、娘の顔だった。哀しげに顔をこわばらせ、そこから私を見つめていた。

——お父さん！

今にもそう叫びたげな表情だった。私は動けなかった。錯覚だとわかっていながら、一瞬にして網膜に焼きついた娘の顔に、金縛りにでもあったかのように固まった。

雑踏のざわめきが突然消えた。あたりの光景が一変して、まるで今いる場所が幻のように静止して見えた。その中で、私の意識だけが現実だった。こめかみを冷たい汗が流れた。時間が永遠に止まったかに思われた。

——美緒。

声にならない呟きが私の口をついて出た。私は呆然と立ち尽くしていた。長い時間が過ぎたように思った。われに返ったのは、慌てて改札を抜けようとした若い女性のスーツケースが膝に当たって「ごめんなさい」と言われたからだだった。

雑踏の喧騒が戻り、コンコース内の時計を見あげると、発車の時刻は過ぎていた。体から力が抜けていくのがわかった。

かろうじて「きのくに線」の乗り入れている十一番ホームにエスカレーターで下りたものの、その後どうやって家まで帰ってきたのか私は憶えていなかった。

暗く、静まり返った我が家のドアを開け、居間のソファーに崩れるように座ったとき、なぜかすべてがこれで終わったこと実感した。虚脱感が胸の中を駆け抜けた。明かりを点けたが、しばらくはそのまま動けなかった。淬のように広がる疲労感も拭えなかった。

やっこの思いで夕食代わりのビールを取り出し、テレビのスイッチを入れると、ちょうどその日最後のニュースを放映していた。

ニュースは新大阪駅構内で起きた人身事故による夕方の新幹線のダイヤの乱れを繰り返し報じていた。彼女の死を知ったのは、翌々日の新聞の死亡広告だった。皮肉にも入稿原稿は、当然営業部長の私のところに回ってきた。原稿は己の甘さを嘲っているようだった。彼女は本籍も現住所も移動させてはいなかった。

死亡広告は、県職員としての兄の立場と、新聞に余計なことを書かれないためのそれなりの口止めを兼ねてだった。

〈ある独白③〉

兄はあたしにだけは自分が味わってきた理不尽な思いをさせたくなかった、とあの夜遅く、彼が帰った後言った。

どこかあたしを慰めてくれているような、久しく感じられなかった優しい響きがそこにはあった。自分で自分に対して言い聞かせてでもいるような話し方だった。

「俺は、必死で学び、どこに出ても恥ずかしくないだけの教養と社会的な地位だけは築きたかった。他人から、蔑みの眼で見られ、とどのつまりはやはり『あっちの人間』は『あっちの人間』でしかないと言われたくなかった。しかし、お前には経験がないからわからないかもしれない、な」

呟くように言い、弱弱しくあたしを見た。

「今だから話すが、絶対に忘れることのできない、俺が高校時代に味わった体験がある。今でも思い出すと怒りで胸が震える。張り裂けそうな悲しい思いに駆られる。——卒業間近の春休みだった。親しくしていた彼女の家を訪れたときのことだ。一年のときからクラブも同じせいであったこともあり、彼女とはほかの誰よりも親しくしていた。いや、ほのかにはあったが、それ以上の感情さえ抱いていた。卒業してからも文通でもよいかから彼女とは付き合いたいとさえ思っていた。しかし、俺は見えてはならない現実をそこで見てしまったよ」

姓を名乗っただけで彼女の母親が一瞬妙な表情を顔に浮かべたのを見逃さなかった、と言った。

「そのときの母親の怖いものでも見たような、困惑しきつた顔は、尋常ではなかった。——怯えさえ浮かんでいるように見えた。——俺はすぐに悟つたさ。その困惑、いや怯えが何によるものかを」

兄の顔が其のとき、自嘲しているようにも、泣いているようにもとれた。

「——以来、俺は自分から彼女とはさりげなく遠ざかるようにした。むろん彼女は以前と変わらないように見えたし、振舞っていた。しかしな、そこには取り繕いを感じないわけにはいかなかった。つまり俺が『あつちの人間』つまり出自が同和地区であることの意味を親に教えられたということの裏返しだった。——この『あつちの人間』であることの現実での意味が夏子、お前に理解できるか。おそらくお前にはわからなかったのだろう。無理もないと思う。学校で教えられるのは所詮机の前での授業の一環であつて、現実ではないからな」

兄は突然対上がり、台所に行くくと、水道の蛇口をひねり、コップに水を入れると、一気に飲み干した。大きく深呼吸を繰り返して、やがて戻ってくるのと続けた。酔いを醒ますためだったのかもしれない。

「お前が言ったように今はもう時代が違う。昭和も終わり、平成の時代に入つてからでもすでに十年が経つんだからな。——確かに世間の意識もすっかり変化した。それは否定しない。実際に俺や親父、お袋もそのことをお前に意識させないようにしてきたのだから当然だ。だが、どんな綺麗ごとを言ってみても、いざ結婚となると話しは別なんだよ。聞き合わせと言う身元調査をしない家がどこにある。『あつちの人間』と親戚になるのを望む家があると思つているのか」

「俺はな、お前が男と付き合つていることを知つたとき、真つ先に自分の体験を思い浮かべた。屈辱よりも悲しさのほうがよみがえつてきたよ。お前もまた同じ思いをするのかと考えると耐えられなかった。——都合のよいように遊ばれているとしか考えられなかった」

兄は日々ろ吸わない煙草に火を点け、さらに酔いを醒ますかのように啜えた。父が吸っている一番安い銘柄の煙草だった。煙草を止めるは言わないが、一日に何箱も吸うわけじゃないんだから、もう少し良い煙草に替えろよ、と常々口にしていた煙草だった。しかし、父はわしはこれで十分だ、といつて頑固に替えようとはしなかった。煙草代といえども兄の給料から出ていたからだ。

「俺は常に世間体を考え、常識を大事にして生きてきた。生きようと努めてきた。きちんとした筋道を立てて世間に接してきたつもりだ。些細な付き合い一つにしても、決して義理を欠くような行いは慎んできた。時にはそんな生き方がわずらわしくなるほど無理をし、世間の『常識』にこだわった。それは絶対に『あつちの人間』だからとは相手に言わせたくなかったからだ。——大学への進学を決めたのもそのためだった。小さな製材所しか勤め先のなかった親父の負担は大きく、経済的に高校へ行くのでさえ難しかったのに、大学など進めるわけがなかった。しかし、お袋にはリヤカーを押しての引き売りまでしてもらい、無理を承知で進学し、県職の試験を受けた。すべてはただ陰で『あつちの人間』と後ろ指をさされたくなかったから、それだけの理由だった。くどいと言われそうだが、お前にだけは絶対にそのような思いをさせたくなかった。——親父やお袋がお前の前で昔話をしなかったのは、俺が『もうそのような時代は終わった』とさせなかったからだ。お前が結婚を考えなければならぬ年齢に近づくとつれ、家族や親戚までもが慎重になつていたの言うまでもないだろう」

「だけどな、お前たちのしていたことは俺には遊びにしか映らなかった。そればかりか相手の男の不誠実な面ばかりが見えてならなかった。どこに真面目にお前との結婚を考えている素振りがあつたというのか、疑問さえ浮かんだ」

その声は弱弱しくなつていった。懸命に醒まそうとしてみても、酔いがかなり回つてきているのかもしれない。それほど飲めないお酒を飲んでいたので。

「若さがそうさせたのかもしれないと思う。おそらくそうだろう。しかし、それでは世間は通用しない。」

俺だつてあそこまで言いたくはなかったよ。自分をも汚す言葉を吐きたくはなかった。酒の力を借りなければならぬほどだった」

「妹をおもちゃにするなは言いすぎだったかもしれない。だが、そこまで言わなければならぬほど俺は怒りに震え、かつて知らされた屈辱がよみがえってきてならなかった。男やその家族に対しての誠実さのなさが火をつけたのだ。結婚をしたいと言いながら、大事な妹を、犬や猫をもらうような態度にしか見えなかつたからだ。それは何も知らない、若さゆえでは済まされない問題だった。男のためにも言わなければならぬ言葉だった」

「夏子、俺はお前を信じていなかったわけではない。信じていればこそ俺はお前を苦しめることを覚悟の上で、お前たちを引き裂いたのだ。お前が本気だとわかっていたからだ」

その時、あたしは、四十歳を目前にした兄が、肩を震わせ、両手の握りこぶしを必死でこらえて泣いている姿を見た。まだ幼かつたころ、父や母の前で同じように声を殺して泣いている兄の後姿が、幼い頃見た覚えのある記憶の彼方に浮かんだ。

あたしさえいなければ、とどこかで囁く声が聞こえたように思った。

(終わり)

私家版
小説集「こゝで、おわかれ」

平成二十二年三月十六日発行

著者 山手 俊介
発行者 井領 祥夫